

同志社大学

2018 年度 卒業論文

大学生の家庭健康度が将来、家事分担の志向性に与える影響

社会学部社会学科

学籍番号：19151089

氏名：王 裕荔

指導教員：立木 茂雄

(本文の総字数：21509 字)

## 要旨

論題：大学生の家庭健康度が将来、家事分担の志向性に与える影響

学籍番号：19151089

氏名：王 裕荔

日本において「男は仕事、女は家庭」という固定的性別役割分業意識に賛成する人数は減少している。しかし依然として日本の女性は社会進出どころか、家庭生活に満足する人は世界各国の中で低い水準である。NHK 国民生活時間調査によると日本の家事をする時間は世界中では男女差が最も大きい国の一つである。では、日本において、こうした法律や人々の意識が実際の働き方や生き方に反映されない要因はこれまで多くの先行研究が行われてきたが、さらなる検討が必要とされている。また、既存の研究において、既婚夫婦に対する家事分担の研究が数多くされているが、現在の未婚者に対する研究が少ない。

そこで本研究では、家族システムが、家事分担に与える影響について検討する。具体的には、オルソンの家族円環モデルに基づき作成した FACESK-16(version4)を用いて、きずな・かじとりの両次元が、将来の理想的な家事分担及び、将来の現実的な家事分担に与える影響を検討する。分析には、3 大学で行った質問紙調査のデータ(N=119)を用いる。分析の結果、円環モデルではきずな・かじとりの両次元とも中庸であれば将来の家事分担志向性が高いということが得られた。

キーワード：家族システム、家事分担、性別役割分業意識

## 目次

1.	はじめに	1
1.1	研究の背景	1
	(1)社会背景	1
	(2)現状	2
1.2	先行研究	3
	(1)性別役割意識研究	3
	(2)家事分担の規定要因研究	4
	(3)家族システム研究	5
	① かじとり	6
	② きずな	6
1.3	概念モデルと仮設の提示	7
2.	方法	8
2.1	調査方法	8
2.2	調査に用いた変数	8
	(1)分析に用いる従属変数	8
	(2)分析に用いる独立変数	9
3.	結果	10
3.1	単純集計	11
3.2	分析結果	11
	(1)かじとりと将来理想的な家事分担の志向性	12
	(2)きずなと将来現実的な家事分担の志向性	12
	(3)かじとりと将来現実的な家事分担の志向性	13
	(4)きずなと将来現実的な家事分担の志向性	14
	(5)個人属性と従属変数の相関分析及び分散分析	14
	(6)家族システムと性別役割分業意識	19
	考察	21
4.	結論	22
	文献目録	
	付録 調査票	

# 1. はじめに

## 1.1 研究の背景

### (1) 社会背景

近年、「男女平等」「女性の社会進出」「女性が輝く社会」など、女性の活躍に期待することを取り上げる機会は増えてきた。2014年、「女性が輝く社会」をつくることは、安倍内閣の最重要課題の一つであると設定し、「すべての女性が生き方に自信と誇りを持ち、活躍できる社会づくりを進めていく」という目標を目指している（すべての女性が輝く社会づくり本部 2018）。日本では80年代以来、このような女性の活躍や育児・介護を推進する法律は少なくない。1986年の「男女雇用均等法」では職場における男女の差別を禁止し、募集、採用、昇給、昇進、退職、定年などの面で男女とも平等に扱うことを定めている法律がある。さらに1992年に民間事業主に対して、雇用した男女労働者から、育児や介護の申請があった場合、雇用関係を継続したまま、一定期間の休暇を認めるよう義務づける「育児休業法」及び1995年に改正する法律が実行した。1999年の職場における男女平等を目指す「男女共同参画社会基本法」が施行され、同年、「男女雇用均等法」の改正では、採用、昇進、退職などにおいては男女差をなくすことが努力義務規定から義務規定となり、その時点から男女雇用差別の改善を目指している。そして、2016年4月、女性の職業生活における活躍の推進に関する法律、通称「女性活躍推進法」が施行された。法律が施行された以後、世間は再び性別役割意識改革や働き方の改革など、仕事と家庭が両立できるよりよい環境を整備できるように努力している。この法律によって、働く女性、または働くという意思があるのに育児・介護などを理由に働けない女性に、職場での活躍を促進する世論がさらに一層盛り上がっている。

つまり、これまでの日本政府は仕事と家庭が両立できるように育児・介護休暇法や次世代育成支援対策推進法、労働時間などの見直しガイドライン、介護・保育職の労働環境改善など、さまざまな法律・制度・環境を積極的に整備している。

以上のように男女平等の実現に向けた取り組みに女性の労働環境と家庭生活の現状と意識をどうなっているのかを次節で検討する。

## (2) 現状

2017年男女格差を指数化した「ジェンダーギャップ」のランキング（世界経済フォーラム 2017）では日本は144カ国中114位に位置し、2018年、全世界女性国会議員の割合は193カ国中、日本はただの160位にとどまり、世界各国のなかで最低レベルだと言える。1986年の「男女雇用機会均等法」の施行から現在に至っても、女性が日本社会における活躍や就労環境などがうまく改善したとは言い切れない。

確かに、高度経済成長期に日本の就労パターンは未婚期に働き、結婚・出産で退職し、子育ての繁忙期が終了した頃に復職するといういわゆるM字カーブを描くことが知られているが、近年では就労女性の増加によりM字カーブの底辺自体が上昇し、かつM字の底も浅くなる傾向がある（落合恵美子 1997）。このように「仕事」の領域においては、性別役割分業は変化しつつある様相がみられる。「仕事」の領域における男女分業が完全に解消されたとは言えないが、「夫は仕事、妻は家庭」という分業は変化しつつあるといえる（松田茂樹 2004）。

女性の労働市場への進出は、家庭内の家事分担に大きな変化をもたらすとされているが、家庭内における男女の家事分担量の違いは現在でも残されたままである（村田ひろ子 2015）。具体的には、NHK国民生活時間調査によれば20歳以上の人の平日1日の家事時間は女性4.25時間なのに対して男性は50分しかいないとなっている。1週間20時間以上家事をしている日本人は男性で4%にとどまる一方、女性では65%に上る。この男女の差は60%以上で、各国のなかで2番目に差が大きい（NHK放送文化局 2011）。日本国立社会保障・人口問題研究所が2013年に実施した「第5回全国家庭動向調査」の結果によると、夫と妻の家事分担割合の平均は、妻85.1%に対して夫14.9%であり、妻の負担割合が圧倒的に多い（国立社会保障・人口問題研究所 2014: 16）。夫の家事に対する妻の期待については、「期待する」は31.4%に過ぎず、他方「期待しない」は68.6%となっている（国立社会保障・人口問題研究所 2014: 22）。

村田（2015）は2012年に国際比較調査グループISSPが実施した調査結果から家事の分担と家庭生活の満足度が関連しているかどうかを調査した。その結果、村田は「食料や日用品の買い物」「食事の支度」「自宅での簡単な修理」「掃除」「洗濯」「家族が病気のときの世話」という6つ種類の変数から家事を自分だけでこなしているという人の割合が高い国では、その家庭生活に満足している人の割合が低い傾向があるということを解明した。そして、国際比較調査グループISSPが世界約50ヶ国と地域を対象にし、「家族と男女の役割」の調査結果によると日本では、家庭生活に「満足」という人が男性で43%、女性で33%しかおらず、これはいずれも各国の中で低い水準となっている。また日本の女性は家事に対する負担感が強く、家事時間が長いという傾向も示されている（小林利行 2013）。

このような状況に対しては、確かに「日本人の意識」調査によれば、夫が台所の手伝いや子供のおもいをするのは当然、と考える日本人が40年間で大きく増えている。女性では51%から90%へ、男性でも56%から88%に増え、男女ともに性別役割分担意識が薄れてきている。しかし家庭の中では相変わらず男女の分担が分かれたままである（NHK放送文化研究所 2015）。村田（2015）は多くの日本人の間で共有されている「家事や育児は男

女分担すべき」という意識と家庭内の実際の役割分担が乖離しているため、依然として多くの家事を担っている女性で不公平感を抱く人が多数に上ることを指摘している。

したがって、確かに男女の機会平等を実現しようとする法律や制度が数多く制定されたが、就労形態やさまざまな生活時間や家庭生活満足度に関するデータを見ると、働き方や生き方に男女での違いが依然として見られる。現代大学生は性別役割分業に対する意識や、彼らの将来家事分担の意識を規定する要因を探っていく。

## 1.2 先行研究

### (1) 性別役割分業意識研究

現代の女性に対するさまざまな不平等は、昔から日本における家父長を中心にした長幼の序や男女の務め、良妻賢母思想から深い影響を受けていると言われている（小山静子 1991）。日本は戦前から始まった近代化による人口構造の変化から戦後高度経済発展による日本近代家族モデルが定着した。1960年代以降、農業から製造業への産業構造の変化に伴って男性のサラリーマン化が急速に進み、「夫は外で仕事、妻は家庭で家事・育児」という男女の役割が定着したと言われる（落合 1997）。また、「夫は仕事、妻は家庭」という性別役割分業は19世紀末から20世紀初頭に誕生し、高度経済成長期にわたって、近代家族を特徴づける重要な要素の一つである。男はサラリーマンとして外に働きに出て、妻は専業主婦として育児・家事に専念する固定役割パターン、つまり「性別役割分業意識」にはめこまれる（落合 1997）。

1985年から10年に1度の頻度で実施されているSSM調査から性別役割分業意識の形成、変動要因として①生年世代仮説、②夫の職業的地位仮説③妻の職業的地位仮説④学歴差仮説⑤労働時間差（時間制約）仮説という五つの仮説が性別役割意識の規定要因であることを予さまざまな学者によって予想された。

吉川徹（1998）が、性別分業の構造を計量的に把握する研究を行なっている。彼は世帯内の性別分業について社会移動の測定論を援用し、「伝統的な性別役割分業から逸脱が全くない場合」から「性別役割分業の全く完全平等」までの状態を生活時間の基に数値化し、その結果を「開放性係数」として表した。その結果、1960年から1995年の数値では90年代からわずかに開放性係数が上昇しているものの性別役割意識はほとんど変化していないと結論付けている。一方、性別役割分業観に対する研究は、アメリカがすでに1980年代に、伝統的性別役割分業意識から「夫は仕事、妻は家事・育児と仕事」という「新・性別役割分業意識」に転換し、性別役割意識を前提とした働き方が固定化されたまま、女性だけに市場労働、家事労働の両方の負担を強いる形となっている（Hoshschild .A .R 1989）。一方、日本においても、働き女性には仕事と家事・育児の二重の負担がかかっていることは指摘されるどころであり、男女共同参画の面からみて問題であるとみられている（内閣府 2018）

大和礼子（1995）は、性別役割意識の多次元性を実証的に検討し、現代女性の家事育児役割を正当化する性役割意識が、「性別によって適正や役割を固定的に振り分け」と「女性にはもともと愛情が備わっており、その愛情によって女性が再生産役割を担うことが、家族メンバーの成長や安心のために役立つ」という論理によって支持される「愛による再生

産役割」が性別役割分業を支える意識となっていることを確認している。

さらに、西村純子（2001）は、性役割意識には、性別と愛情の理論に加えて、子育て規範をあらわした「よい子育て」意識の3つの次元があることを指摘している。西村は性別役割意識には「性による役割振り分け」とは別の理論によって支持される「愛による再生産役割」にあたる側面は、論理性の違いから家事分担に対する異なった効果をもつことと考えている。

岩間暁子（1997）は実際の家事労働と家事分担の満足感のズレを生み出すメカニズムの一因として性別役割意識の内面化による効果があると述べている

これまでの研究が明らかにしてきたように、家事労働時間に対する男女の違いがありながらも、現在の家事分担を不公平だとみなす女性は、家事労働時間の差を直接反映するほどには多くない。このような状況は、性別役割分業意識の内面化や夫婦関係満足度に関する研究でも、夫婦関係満足度に対して、夫婦間の家事分担のあり方というよりも夫の情緒的サポートが重要であるという知見が見いだされている。したがって、家事分担満足度における性別役割分業意識の効果の解明については、家事分担が性別役割分業意識のどの側面とどのように関連しているのかを明らかにする必要があると私と考えられる。

## (2) 家事分担の規定要因研究

家事分担に関する既存の研究は主に、夫の家事参加要因を中心とするものである。松田（2004）は、父親の育児参加の規定要因として、①家事育児の量②時間的余裕③母親に対する相対的資源量④性別役割分業意識という4つの要因を指摘している。これらはつまり、①必要だからする②時間があるからする③母親に対する力関係が弱いからする④規範として手伝うべきだからする、ということに言い換えられる。

夫婦の家事分担規定要因は主にアメリカにおいて数多く研究がなされてきた。アメリカの Shelton and John（1990）の研究は代表的である。その中では、家事分担を規定する要因として大きく3つに整理されている。すなわち、①相対的資源仮説、②時間制約仮説、③性別役割分業意識仮説3つが主に検討されてきた。

- 相対的資源仮説とは収入や教育、職業などの社会経済的資源を多くもつほうが家事分担から免れるという仮説である。より社会経済的資源をもつほうが、勢力を持ち、家事を負担することから逃げられる。
- 時間的制約説は夫婦のうち時間資源の多いほうが、より多くの家事を行う。労働市場における労働時間が長いほど、家で家事を行わないということである。
- 性別役割分業意識仮説とは妻が家事に責任を持つべきだという価値観を持っている場合、夫の家事参加率が低くなる。

稲葉昭英（1998）はこれらの仮説に、次の3つの仮説を追加している。まず①ニーズ仮説とは日本がアメリカにおける代表的な仮説に基づき、日本でさらに発展してきた仮説である。ニーズ仮説は家事の量が多いほどニーズが高くなるため、夫は家事に参加する。子供の年齢や人数、親との同居はニーズ仮説の変数である。特に子供の数が多いほど、夫は家事に参加する。また、ニーズ仮説に用いる変数は同時に代替資源仮説の変数でもある。②代替資源仮説は夫婦以外の人間が家事を行うことで、夫婦の家事が減るというものであ

る。そして、③情緒関係仮説は夫婦の情緒関係が強いほど家事育児を夫婦が一緒に行うことが増加し、夫の家事参加が高まるというのである。

乾順子 (2011) は妻の従業上の地位による差異仮説を相対資源仮説の延伸として考え、夫の家事頻度・割合は、妻が就業することによって増加する（正規、パート、無職の順に多くなる）と妻の家事頻度・割合は妻が就業することによって減少する（正規、パート、無職の順に少なくなる）ことを証明した。

多くの家事分担に関する既存の研究は主にこれら 6 つの仮説を用いて、夫婦の育児分担を検討している（鈴木富美子 2011）。

そのほか、アメリカの Hoshschild. A. R. (1989) は、女性が働くことを支持しながらも、自身が家事することに抵抗する夫の意識を分析し、「夫の抵抗 (resistance)」という態度に注目した。Hoshschild. A. R. (1989) は、1970 年後半から 1988 年にかけて 50 組の子どもを持つ共働き夫婦、その他 45 人にインタビューし、12 組の夫婦を対象として詳細な質的観察を用い、そのうち 10 組についての事例を紹介している。「夫の抵抗」の例としては、妻の仕事の継続を支持し協力しているふりをしながら、自分が家事をすることをわざと忘れる、帰宅時間を遅らせるなどの形で消極的に拒否し、抵抗する夫。妻に自分の仕事への野心と一体になってくることを望む夫が挙げられる。しかし、このような夫は自分が仕事上で成功することが重要であることを前提としている。さらに妻が働くことに反対する夫や家事をやらないことでプライドを保つ夫もいるなど、事例によってそれぞれ妻の家庭役割意識、夫の仕事を支える妻役割意識、そして母親役割意識が、家事分担に抵抗する意識の背景にあると Hoshschild. A. R. が思う。

久保桂子 (2009) は Hoshschild. A. R. が主張した夫が家事をすることに対する抵抗感を変数化し、「夫が食事の準備をする」「夫が洗濯する」ことに「どれほど抵抗を感じるか」の 2 項目を 4 件法で尋ねた。結果として、収入や通勤、勤務の合計時間のほか、性別イデオロギーとして「夫の家事への抵抗感」という意識が夫の家事分担の促進を防いでいることがわかった。

### (3) 家族システム研究

家族システム論は父・母・子からなる家族全員を治療の一単位として面接をする家庭療法の臨床から生まれた。1960 年代のはじめ、全米各地のセンター機関で個々独自に家族システムのモデル（仮説）が提案された。

FACES は 1979 年に米国ミネソタ大学の学者オルソン (Olson D.H.) らが開発した。家族システム論と円環モデルを基盤に、家族機能の状態を柔軟性（適応性）と凝集性の二次元から「はい」「いいえ」の二択で得点化する。柔軟性（適応性）と凝集性それらを促進させるコミュニケーションが主要な構成概念であり、柔軟性（適応性）と凝集性が中間レベルにある家族を、家族機能が良好である判断する (Olson D.H. 1979)。この調査は FACES II, FACES III, FACES IV まで改訂が進んでおり、成人を対象とした研究において信頼性と妥当性が確認されている。

FACESKG IV はオルソンの円環モデルを基盤にして、立木茂雄 (2015) が日本の社会や文化に適合するように作成したものである。凝集性を「きずな」とし、柔軟性を「かじとり」という 2 つ家族機能に置き換え、FACES と同じく二次元でモデルを説明している。



さらにコミュニケーションを加えて、3つの家族機能の組み合わせが、日本における家族状況を説明しやすいと捉えられた（梶尾みゆき 2018）。

#### ① かじとり

円環モデルではかじとりを「状況的・発達のストレスに応じて家族（夫婦）システムの権力構造や役割関係、関係規範を変化させる能力」と定義する。この次元に関係する具体的な変数は家族の権力構造（自己主張と支配）や交渉（話し合いや処理）のスタイル、役割関係、関係規範などである。家族のかじとりは形態変容（変化に対して肯定的）と形態維持（変化に対して否定的）という二つのフィードバックのバランスからなる。

「家族のかじとり」が極端な水準、すなわち「融通なし」と「てんやわんや」にある家族は、家族の機能度・健康度が低く、問題を抱える可能性が高いとした。またその家族では、家族システムがストレスへの対処資源や、リスク因子への防御因子として機能できる可能性が低いと定義した。「家族のかじとり」が中庸な水準、すなわち「キッチリ」と「柔軟」にある家族は、家族の機能度・健康度が高く、問題を抱える可能性が低いとした。またその家族では、家族システムがストレスへの対処資源や、リスク因子への防御因子として機能できる可能性が高いと定義した。

#### ② きずな

円環モデルではきずなを「家族の成員がお互いに対してもつ情緒的結合」と定義する。きずなは、情緒的結合、境界、連合、時間、空間、友人、意思決定への参加、趣味とレクリエーションなど変数から測定される。具体的には、これら個々の変数をもとに成員がもつ情緒的ベクトルのバランスを測定する。

「家族きずな」一つのベクトルは内向きで、家族メンバーを感情的に同一化させ、きずなを極端に強い段階「ベッタリ」に追いこむ。もう一つ外向きのベクトルで、家族の成員を家族システムの外に追いやる。外向きのベクトルはきずなを極端に弱い段階「バランス」に導く。この二つのベクトルのバランスがとれたとき「ピッタリ」と「サラリ」に家族システムはもっともうまく機能し、個人成長も促進されると定義している（立木 2015）。

立木（2015）は「伝統的な規範や固定性別役割意識から自由に、家族成員個々が自律・自立した個人として交渉や共感、配慮などのコミュニケーションを通じて、任意なライフスタイルとして家族のあり方を合意の上で選び取っているとダメだと仮説化し、このような家族のあり方を『合意性家族』と命名し、家族システムを用いて、きずなとかじとりの両次元でバランスのとれた段階に位置する夫婦・家族システム（バランス型）は、極端の段階に位置するシステム（極端型）よりも、家族ライフサイクルの各段階でよりうまく機能することを測定した。

既存の先行研究は、主に既婚女性や共働き家庭に対する家事分担の決定要因を解明調査が多く、家事・育児についての測定は回数や時間などの量的な測定方法であった。また調査対象は基本的には既婚夫婦であり、現在の高等教育を受けていた大学生に対する意識調査はあまりない。そのほか、家事分担による研究が家庭生活に影響する家族健康度との関係性を研究もほとんどなかった。したがって、本研究では調査対象者を大学生とし、大学生の家族健康度と家事育児分担及び現在大学生の性別役割分業意識の関係性を明らかにしていくと考えている。

### 1.3 概念モデルと仮設の提示

前節の先行研究をふまえて、本研究では、独立変数としては家族システム、個人属性を用いて、将来家事分担の志向性の規定要因を測る。本節は図を用いて、概念モデルと仮説を述べる。図1の問1から問17は筆者が本研究のデータとして使用した調査票の中で割り振っているものである。調査票の質問については次章で説明する。

1.2に述べた先行研究から、性別役割分業意識は家事分担満足感に対する異なった効果を持つことが大和ら（1995）により検討された。また家族システムを用いて、性別役割分業意識や家族機能度との研究が多い。つまり、家事分担の規定要因については多くの研究者が性別役割意識仮説による影響することが解明し、また性別役割分業意識を経由し、家庭機能度と家事分担の因果関係を探索してきた。しかし、図1の家族システムが直接、家事育児分担意識に影響しているかどうかは先行研究ではまた未解明であり、そこで筆者は「大学生の家庭健康度が将来、家事分担の志向性に与える影響」ということをリサーチクエスチョンに設定し、大学生の家族健康度と将来家事分担の志向性の因果関係モデルを調査フレームとして使用する。つまり、従属変数として設定した将来家事分担の志向性及び現在の性別役割分業意識は、家族システム（かじとり・きずな）に影響を受けることを測定する。本研究では、家事システムが中庸であればあるほど将来の家事分担は平等であり、性別役割分業意識も平等であることを想定した。

そのほか、回答者の個人属性については、稲葉（1998）と乾（2011）の相対的資源仮説と妻の従業上の地位による差異仮説を参考し、回答者の両親の学歴や職業などの社会経済的資源を多くもつほうが女性は家事分担から免れると考える。つまり、①男女共に家事負担する志向性は、回答者両親職業の地位の差異によって増加する（ホワイトカラー、ブルーカラーやパートの順に高くなる）。②男女共に家事分担する志向性は、回答者両親の学歴が高いであれば増加する。③男女共に家事分担する志向性自分が社会的な階層が高いであれば増加する。

以上が、筆者が本研究で立てた仮説の詳細である。この仮説を検証するために、次の章以後で分析を進め、得られた結果を記述する。

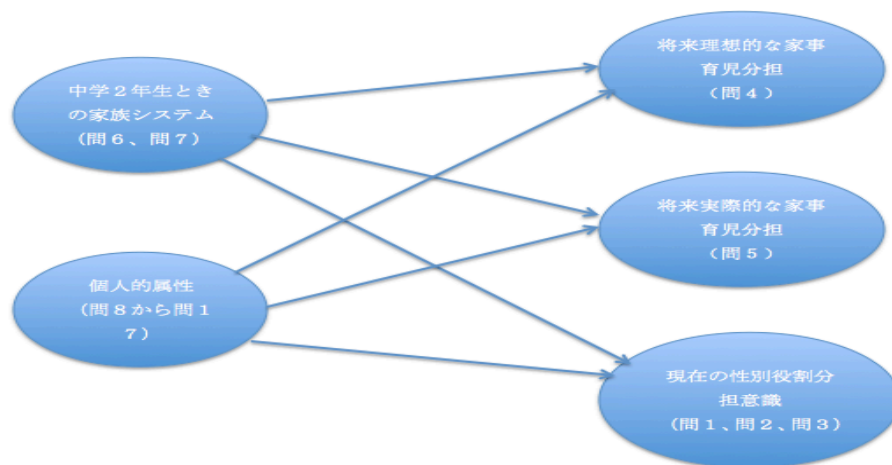


図1 本研究の仮説モデル

## 2. 方法

### 2.1 調査方法

調査は、2018年に10月に、同志社大学、立命館大学、関西大学三大学に在学中の大学生の男女を中心した質問紙調査である。「私立大学生の家族健康度が将来、家事育児の志向性に与える影響」ことを目的として行った。調査全体の回収数は121票であり、そのうち回答に不備のみられた2票を除外した有効回答数は119票（男性が56人、女性が63人、無回答が2人）であった。有効回収率は98.3%である。なお、調査票の表紙には、調査の趣旨・得られたデータの使用目的・回答から個人が特定されたり個人情報漏洩したりする心配はないことを明記した。得られたデータはすべて、統計ソフトSPSSで数値化して処理を行い、単純集計の後、箱ひげ図による中央値の比較、相関分析、分散分析を行った。

次章で、単純集計では、分析者の個人属性及び両親の属性を示した。分析するため、両親の属性である職業と学歴はダミー変数化した。職業はホワイトカラー層、ブルーカラーやパートに2つのカテゴリーにした。学歴も大学卒以上と大学卒以下に2つのカテゴリー化した。尺度は、従属変数である将来理想的な家事分担と将来現実的家事分担の尺度と性別役割意識や家族システムなど独立変数の信頼性について説明する。最後に、それらの尺度、変数をカーブリーニア仮説による箱ひげ分析、相関分析の結果をまとめる。

### 2.2 調査に用いた変数

#### (1) 分析に用いる従属変数

性別役割意識項目として、久保（2009）の性別役割意識項目を用いた。夫は仕事、妻は家事・育児と役割分担すべき」という意識、「食事、洗濯、掃除など女性が男性より多く担うべき」という意識、「自治会への参加は女性が男性より多く担うべき」という意識、「近所との付き合いは女性が男性より多く担うべき」という意識、そして、「育児と介護は女性が男性より多く担うべき」という5つの意識は4件法で尋ね、「あてはまる」1点、「どちらかというと言えばあてはまる」2点、「どちらかというと言えばあてはまる」3点、「あてはまらない」4点で得点化した。

中川まり（2010）が用いる家庭責任意識項目と地域活動・個人の生活を含む男女平等感を表す項目を「家庭生活中的の平等感」「地域活動面の平等感」「学校の平等感」「就職活動中の平等感」、「政治・経済分野の平等感」最後に「法律や条例制度方面の平等感」という大学生に答えやすいための6項目を選定し、4件法で尋ね、「あてはまる」1点、「どちらかというと言えばあてはまる」2点、「どちらかというと言えばあてはまらない」3点、「あてはまらない」4点で得点化した。

最後に男女に関する印象を測定するため、以下「人から危害を加えられそうになったときに男性に見守ってほしい」「大地震や津波など緊急事態のときにその場を取り仕切るのは男性でないとダメだ」「自分が病気や介護を必要とするとき、女性に面倒を見てほしい」「自分が大きな病気で手術しなければならないときに男性でないとダメだ」「重いものを運んでもらうときは男性でないとダメだ」「育児や介護など世話を見てもらう人はやはり女性だ」などそれぞれ6項目を筆者が独自で作った。方法としては同じく4件法で尋ね、「あてはまる」1点、「どちらかというと言えばあてはまる」2点、「どちらかというと言えばあてはま

らない」3点、「あてはらない」4点で得点化した。

従属変数として用いる将来の家事分担の志向性は、現在大学生である調査対象の将来への不確定性に考えた結果、将来家族ができた時の理想的な家事分担（理想型）と実際を予測する（現実型）家事分担という二つの従属変数を用いる。変数は日常的な家事分担度を取り上げ、岩井（2001）や松田（2004）に従った「食事の用意」「食事あとの片付け」「食料品や日用品の買い物」「洗濯」「掃除（お部屋、お風呂、トイレなど）」の5項目を問い合わせた。それぞれの回答の「主に女性」に1点、「どちらかという女性」に2点、「男女同程度」に3点、「どちらかという男性」に4点、「主に男性」に5点と得点を与え、合計点を算出した。また、結果を解釈しやすく説明するため、元々は最低点=5、最高点=25となっていた。合計点から15点をマイナスすることで、0に近づけば近づくほど「男女同程度」に同感することを示すよう値を再割り当てした。

## (2) 分析に用いる独立変数

家族システム項目は立木が作ったFACESKGIV-16のversion 4の尺度値を使用している。この尺度は、きずな・かじとりをそれぞれ8項目のサーストン尺度により測定する。きずな、かじとりのそれぞれ8項目のうち、「自分の家族に一番当てはまる」と思う項目の一つを選択することにより、当該選択項目に付与された尺度をもって家族の測定値とするものである。表1-1は今回利用した家族システム評価尺度FACESKGIV-16（version 4）のかじとり項目を項目順に並べるものである、表1-2は今回利用した家族システム評価尺度FACESKGIV-16（version 4）のきずな項目を項目順に並べたものである。

かじとりの強さを測定ため、各水準を以外の尺度を、①「融通なし」-3.5,-2.5。②「キッチリ」-0.5,-1.5。③「柔軟」1.5,0.5。④「てんやわんや」2.5,3.5という四つの水準となっている。これらの尺度は家族成員個々が権威や集団規範に準拠するのではなく、交渉や共感、配慮などの問題解決過程に通じて、自分たちのあり方をどの程度民主的に合意しているかと測る指標とした。

かじとりの次元が中庸な段階（キッチリと柔軟）にあるとき、伝統的な規範意識や固定的な性別役割意識からは自由で、将来理想的な家事分担の志向性や将来現実的な家事分担の志向性が平等であると想定している。一方、かじとりが極端（融通なしとてんやわんや）な状況では、固定的な性別役割意識に同感し、将来理想的な家事分担の志向性や将来現実的な家事分担の志向性が主に女性が負担することになると考える。

きずなの強さを測定ため、各水準を以外の尺度を、①「ベッタリ」3.5, 2.5。②「ピツタリ」1.5, 0.5。③「サラリ」-0.5, -1.5。④「バラバラ」-3.5, -2.5という四つの水準となっている。

家族成員間の情緒的結合がきわめて強く家族境界がきわめて閉鎖的な段階「ベッタリ」から逆にきわめて開放的な段階「バラバラ」の両極の間で、家族境界外部と内部とのバランスが取れた状態（ピツタリとサラリ）にあるとき、固定的な性別役割意識から自由に、将来理想的な家族の分担の志向性や将来現実的な家族分担の志向性が平等であると想定する。

表 1-1 質問票に用いる中学 2 年生時の家族かじとり項目

設問番号	項目	尺度値
1	私の家では問題が起こると家族みんなで話しあい、決まったことはみんなの同意を得たことである。	0.5
2	私の家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆で補い合うこともある。	-0.5
3	私の家では困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断を下す人がいる。	-3.5
4	私の家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる。	1.5
5	私の家では家の決まりはみんなが守るようにしている。	-1.5
6	私の家ではみんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない。	2.5
7	私の家では問題が起こると家族で話しあいがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がとおる。	-2.5
8	私の家では家族で何か決めても、守られたためしがない。	3.5

表 1-2 質問票に用いる中学 2 年生時の家族きずな項目

設問番号	項目	尺度値
1	私の家ではだいたい各自すきなように過ごしているが、たまに家族一緒に過ごすこともある。	-0.5
2	私の家では子どもが落ち込んでいるときは親も心配するが、あまり聞いたりしない。	-1.5
3	私の家ではもしなにかが悩みあったら、家族に相談することがある。	1.5
4	私の家では家族はお互いの体によくふれあう。	3.5
5	私の家では家族の間で、用事以外の関係は全くない。	-3.5
6	私の家では家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がなない。	-2.5
7	私の家では休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある。	0.5
8	私の家ではだれかの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている。	2.5

### 3. 結果

#### 3.1 単純集計

調査は 2018 年 10 月に在学中の、同志社大学、立命館大学、関西大学の三大学を中心とした 18 歳から 34 歳の大学生に対する質問紙調査である。そのうち、外国人対象者が 44 人 (36.6%) である。全体的な属性から見ると男性が 56 人 (46.3%)、女性が 63 人 (52.1%)、無回答が 2 人 (1.7%) であった。中学 2 年生の時に父親と同居している人は 106 人 (87.6%)、母親と同居している人は 110 人 (90.8%)、兄弟と一緒に同居している人は 72 人 (59.5%)、祖父母と同居している人は 23 人 (19%)、一人暮らしは 3 人 (2.5%) であった。一方、現在父親と同居している人は 46 人 (38%)、母親と同居している人は 52 人 (43%)、兄弟と同居している人は 41 人 (33.9%)、一人暮らしは 57 人 (47.1%)、その他は 3 人 (2.5%)

であった。

両親の職業については、父親はホワイトカラー層で回答する人は 87 人 (71.9%)、ブルーカラー層は 20 人 (16.5%)、パートと無職は 1 人 (0.8%)、無回答は 13 人 (10.7%) であった。そして母親の職業はホワイトカラーであるのは 44 人 (36.4%)、ブルーカラー層は 4 人 (3.3%)、パートや無職の人は 39 人 (32.2%)、専門主婦は 24 人 (19.8%)、無回答は 10 人 (8.3%) であった。

両親の学歴について、父親の学歴は高卒 (中卒も含む) 以下である 26 人 (21.5%)、専門学校や短期大学卒は 16 人 (13.2%)、大学卒以上は 71 人 (58.7%) であった。母親の学歴は高卒 (中卒も含む) 以下である人は 27 人 (22.3%)、専門学校や短期大学卒は 45 人 (37.2%)、大学卒以上は 42 人 (34.7%) であった。無回答は両方とも 7 人 (5.8%) であった。自分が思った社会階層については、一番上と思っている人は 2 人 (1.7%)、真ん中と思っている人が最も多く 111 人 (93.3%)、そして一番下と思っている人は 5 人 (4.1%) であった。

### 3.2 分析結果

尺度化、数量化した変数を用い、分析を行った。従属変数である性別役割意識は、尺度作成において、プラスが伝統的な性別役割意識に同感しない、マイナスが伝統的な性別役割意識に同感することである。ここでは、結果を解釈しやすくするために、4 件法で尋ね、「あてはまる」1 点、「どちらかといえばあてはまる」2 点、「どちらかといえばあてはまらない」3 点、「あてはまらない」4 点で得点を逆転させ、つまり得点が高ければ高いほど伝統的な性別役割意識に同感する、得点が低ければ低いほど伝統的な性別役割意識に同感しないということである。

一方、もう一つの従属変数である将来家事分担の志向性箱ひげ図による中央値の比較分析するとき解釈しやすくするために、元々は最低点=5、最高点=25 となっていた。合計点から 15 点をマイナスすることで、0 に近づけば近づくほど「男女同程度」に同感することを示すよう値を再割り当てした。

□ かじとりと将来理想的な家事分担の志向性

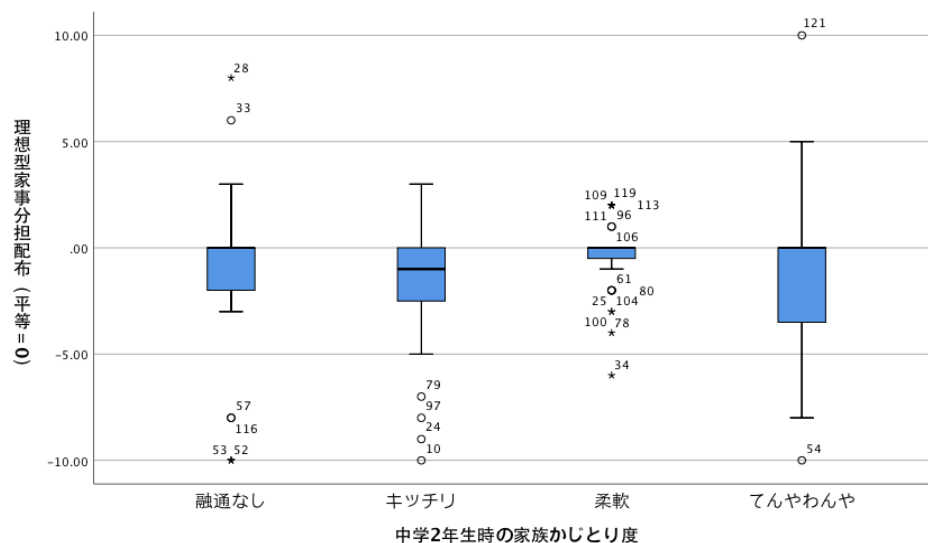


図 2-1 中学 2 年生時の家族かじとり度と理想型家事分担志向性分布 (筆者作成)

中学 2 年生時の家族健康度を測るための FACESKGIV-16(version 4)のかじとり得点の素点を基に-2 未満は融通なし、-2 以上 0 未満はキッチリ、0 点以上 2 点未満は柔軟、2 点以上はてんやわんや、とカテゴリー化し、それぞれに対応する理想型家事分担の得点 (平等 = 0) を示すにより、関係の形状を視覚的に図 2-1 に箱ひげ図に表示した。

かじとりと理想型家事分担配布のありようは、円環モデルの中庸な状態 (柔軟) と極端な状態 (融通なし) にある時ともに平等 (=0) に近い。つまり、家族システムのかじとりは中庸と極端であるにも関わらず、理想的な将来では、男女共に家事を分担することである。仮説と差異がある。

□ きずなと将来理想的な家事分担の志向性

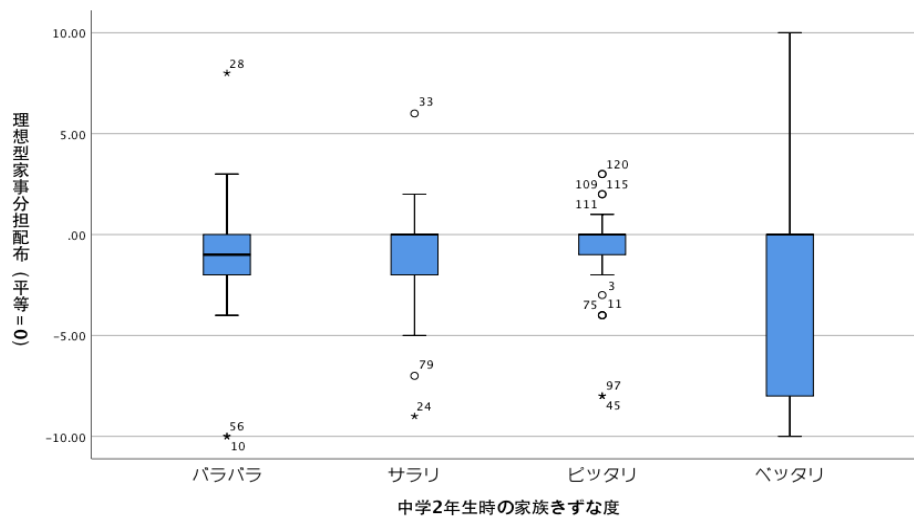


図 2-2 中学 2 年生時の家族きずな度と理想型家事分担志向性分布 (筆者作成)

中学2年生時の家族健康度を測るための FACESKGIV-16(version 4)のきずな得点の素点を基に-2未満はバラバラ、-2以上0未満はサラリ、0点以上2点未満はピッタリ、2点以上はベツタリ、とカテゴリー化し、それぞれに対応する理想型家事分担の得点（平等=0）を示すにより、関係の形状を視覚的に図2-2に箱ひげ図に表示した。

かじとりと理想型家事分担配布のありようは、中庸な状態（サラリとピッタリ）と極端な状態（ベツタリ）にある時とも平等（=0）、つまり、家族システムのきずなは中庸と極端であるにも関わらず、理想的な将来では、男女共に家事を分担することである。仮説と差異がある。

□ かじとりと将来現実的な家事分担の志向性

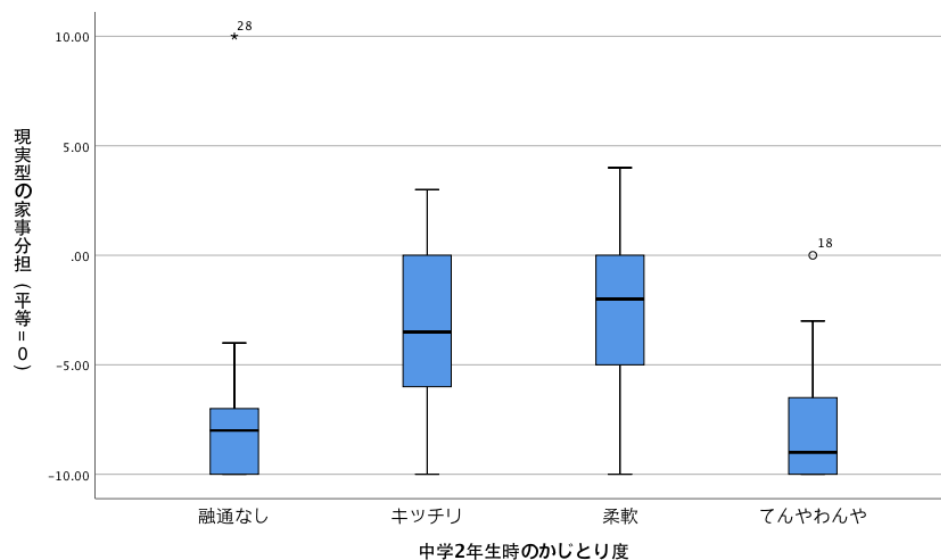


図3-1 中学2年生時の家族かじとり度と現実型家事分担志向性分布（筆者作成）

中学2年生時の家族健康度を測るための FACESKGIV-16(version 4)のかじとり得点の素点を基に-2未満は融通なし、-2以上0未満はキッチン、0点以上2点未満は柔軟、2点以上はてんやわんや、とカテゴリー化し、それぞれに対応する理想型家事分担の得点（平等=0）を示すにより、関係の形状を視覚的に図3-1に箱ひげ図に表示した。

かじとりと将来現実的な家事分担の関係は、中庸な状態（柔軟、キッチン）にあるときに最も0に近い、つまりかじとりが中庸な「柔軟」であれば、将来の家事は男女同程度で担当したいのため、最も平等となる。次に「キッチン」の状態も0に近いということで、かじとりが「キッチン」である状態もわりと家事分担が平等である。両極端（てんやわんや、融通なし）では得点が大きく負に傾く、つまり将来現実的に家事を担当する割合は主に女性という考え方が多いことで、仮説と一致する。



□ きずなと将来現実的な家事分担の志向性

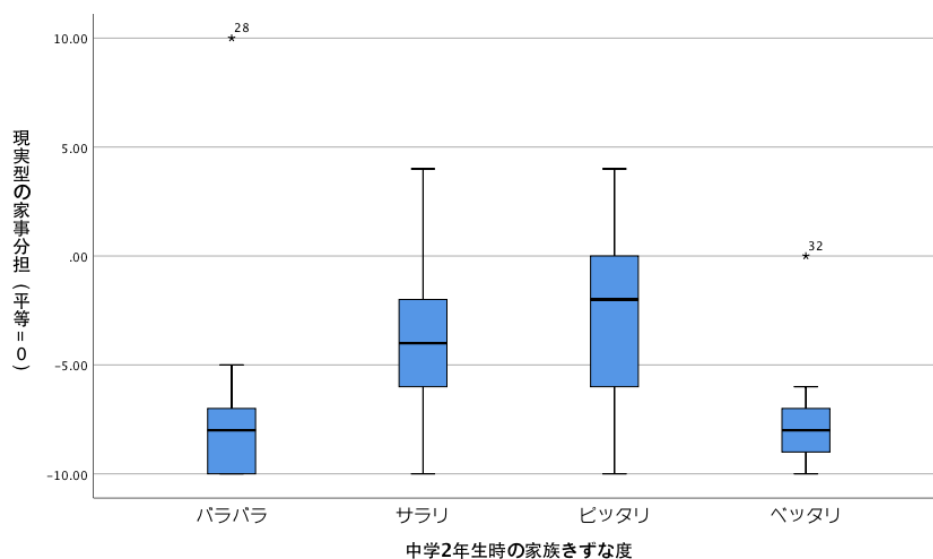


図 3-2 中学 2 年生時の家族かじとり度と現実型家事分担志向性分布 (筆者作成)

中学 2 年生時の家族健康度を測るための FACESK GIV-16(version 4)のきずな得点の素点を基に-2 未満はバラバラ、-2 以上 0 未満はサラリ、0 点以上 2 点未満はピツタリ、2 点以上はベツタリ、とカテゴリー化し、それぞれに対応する現実型家事分担の得点 (平等=0) を示すにより、関係の形状を視覚的に図 3-2 に箱ひげ図に表示した。

きずなと将来現実的な家事分担の関係は、中庸な状態 (ピツタリ) にあるときに最も 0 に近い、つまりきずなが中庸な「ピツタリ」であれば、将来の家事は男女同程度で担当したいため、最も平等となる。次に「サラリ」の状態も 0 に近いということで、きずなが「サラリ」である状態もわりと家事分担が平等である。しかし両極端 (ベツタリ、バラバラ) では得点大きく負に傾く、つまり将来現実的に家事を担当する割合は主に女性という考えが多いことで仮説と一致する。

(5) 個人属性と従属変数の相関分析及び分散分析

表 2-1 回答者の年齢と従属変数の相関分析

		理想型の家事分担	現実型の家事分担	性別役割分業意識
		(平等=0)	(平等=0)	
回答者の年齢	相関係数	.182*	-0.028	.229*
	N	120	120	115

表 2-1 回答者の年齢と従属変数の相関分析

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

回答者の年齢と理想型の家事分担志向性、性別役割意識の関係をみるために、相関分析を行った。その結果、回答者の年齢と従属変数との有意確率はそれぞれ 0.047、0.014 であり、つまり回答者の年齢は理想型の家事分担と性別役割分業意識と高い正の相関が認められた。年齢が高いほど家事は主に男性に負担し、性別役割分業意識は伝統的である。この結果については、一般的に想定される関係とは逆の関係である。先行研究では、性別役割分業意識は伝統的であるほど、家事分担は主に女性が負担することが多いと確認されており、この想定が一般的であると考えられる。この結果については今回の調査から十分なデータが得られないと説明はかなわないが、今後は標本数が増加させることで検討していきたいと思う。

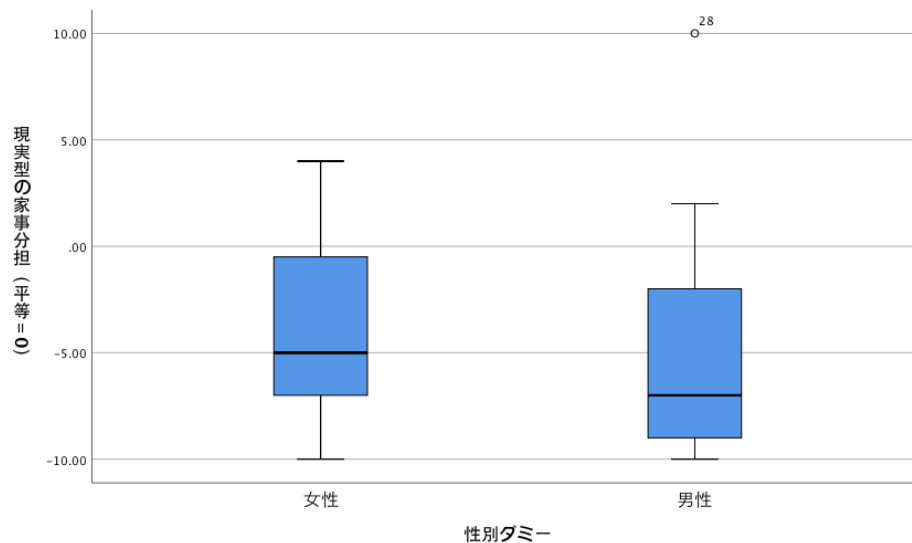


図 4 回答者の性別と現実型の家事分担意識との関係 (筆者作成)

次に分散分析の結果から見て、回答者性別の違いにより現実型の家事分担意識に差があるかどうかを、分散分析により検討した。Welch の修正分散により、5%水準で有意差がみられた ( $F(1, 111.20)=4.66, p<.05$ )。性別と現実型の家事分担意識との関係を箱ひげ図により示す (図 4)。差を具体的に見ていくと、男性は女性に比べ、将来の家事分担について女性のほうが負担すべきだと考えていることがわかった。この結果は、久保 (2009) と Hoshchild. A. R. (1989) の家事分担の規定要因に対する「夫の抵抗度」という仮説で説明できると考えられる。つまり、男性は家事分担に対する抵抗感を持っているため、将来家事を女性が主に担ってほしいという考えを持っている。しかし本研究の対象は大学生であり、既婚男性に対する家事分担の意識調査は今後の課題の一つだと考える。

		理想型の家事分	現実型の家事分	性別役割意識
		担 (平等=0)	担 (平等=0)	
出身	相関係数	.280**	0.039	0.137
	N	119	119	114

表 2-2 回答者の出身国と従属変数の相関分析

\*\*．相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

また、本研究は日本人だけではなく、日本に留学している 44 人（36.6%）の中国人留学生を対象に調査票を配った。結果として、確かに理想型の家事分担配布や性別役割分業意識は回答者の国籍とは有意ではないが、現実型の家事分担の分布は相関係数 1% 水準で、有意確率は 0.002 で有意であった。つまり、中国人は日本人と比べて、将来実際に男性が家事を担う意識が高いということがわかった。村田（2015）は、本研究の結果と同じく「日本では、依然として男性は稼ぎ手、女性が家事の担い手という家庭が多く、家事分担が不公平だと感じている女性が多いことを見てきた。フルタイム勤務の男女の比較においても、女性が圧倒的に家事を担っているのが日本の特徴である。その一方、男性は家事分担が少ないと自覚している姿も浮かび上がった」ということを指摘している。すなわち、日本男性の家事分担率は村田が調査で比較している国々の中で、低いレベルに位置しているのである。

以上のことから、「良妻賢母」という思考は元々、中国から日本に伝わったにも関わらず、なぜ、現在の日本人大学生は中国人大学生より家事分担する意識が薄いのかについてという研究はさらなる検討する必要があると考えられる。筆者は現在、中国において流行っている「専業主夫」や「育児パパ」になるメリットを広めることや中国社会における女性への支援の充実に関係があるのではないかと考えている。今後は、家事分担、家庭生活の満足度を規定する要因は各国で異なっているため、その歴史及び社会背景についてさらなる検討を要すると考えている。

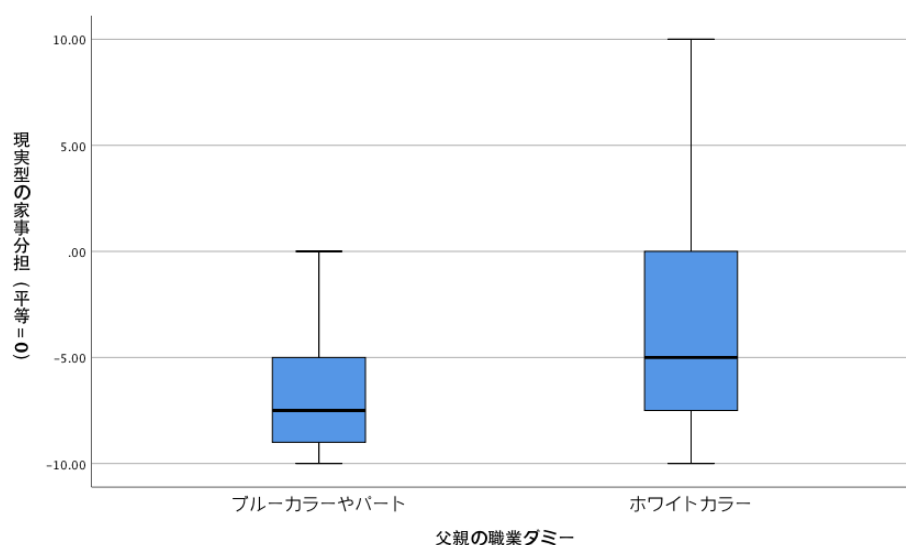


図 5-1 回答者の父親の職業と現実型の家事分担意識との関係（筆者作成）

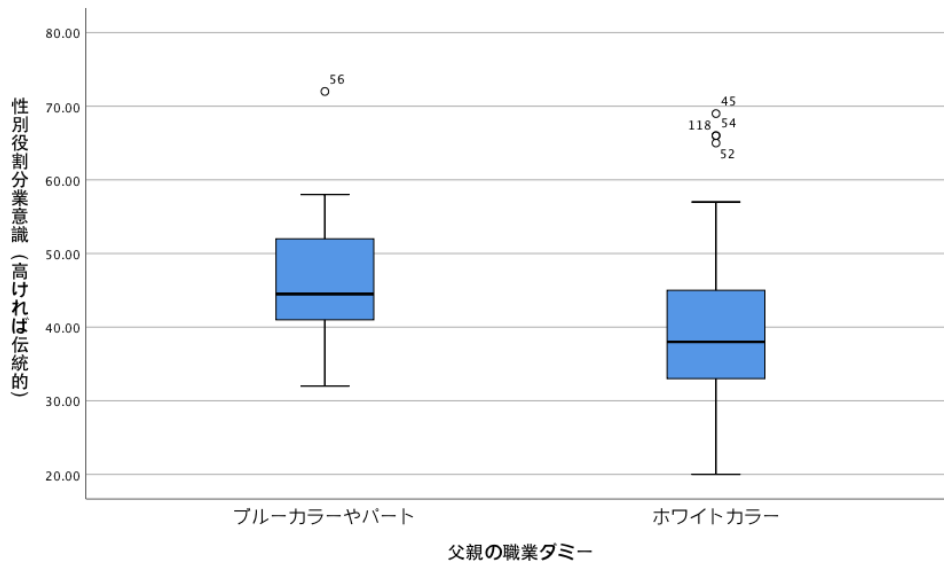


図 5-2 回答者の父親の職業と性別役割意識との関係（筆者作成）

分散分析の結果から見て、回答者の両親の職業の違いにより現実型の家事分担意識や性別役割意識に差があるかどうかを分散分析により検討した。まず父の職業をホワイトカラーとブルーカラーという 2 つのカテゴリに分類し、ダミー変数化した、Welth の修正分散により、5%水準で有意差がみられた ( $F(1, 38.91)=7.32, p<.05$ )。父親の職業と現実型の家事分担意識との関係を箱ひげ図により示した(図 5-1)。差を具体的に見ていくと、父親の職業はホワイトカラーであればブルーカラーやパートに比べ、将来の家事分担は男女平等に分担すべきだと考えている人が多いことがわかった。次に性別役割分業意識に注目すると、Welth の修正分散により、5%水準で有意差が見られた ( $F(1, 29.07)=5.12, p<.05$ )。父親の職業と現実型の家事分担意識との関係を箱ひげ図により示した(図 5-2)。差を具体的に見ていくと、父親の職業はホワイトカラーである人は伝統的な性別役割分業意識に同感しない、父親の職業はブルーカラーやパートの仕事に従事であれば性別役割分業意識は伝統であることで、仮説と一致する。

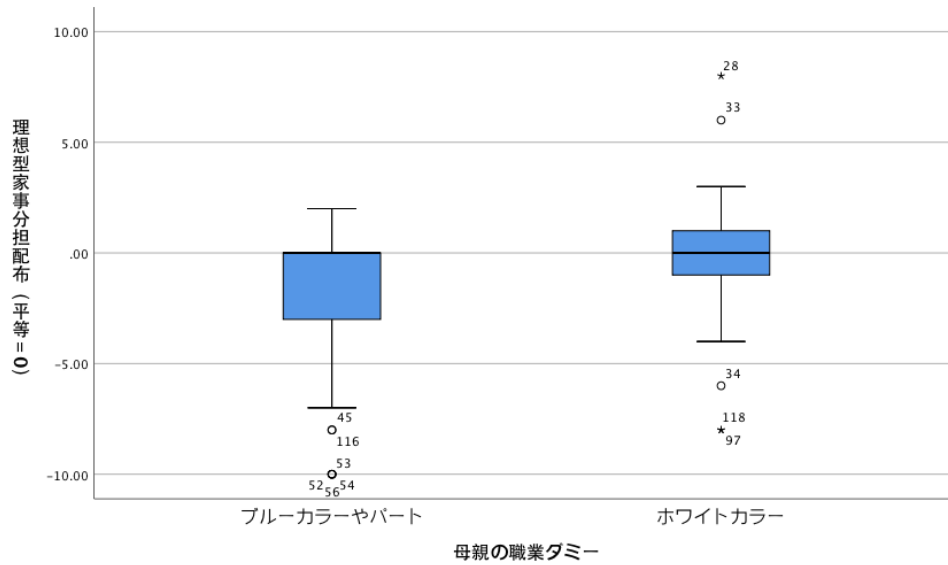


図 5-3 回答者の母親の職業と現実型の家事分担意識との関係（筆者作成）

母親の職業も父親と類似する。まず父の職業をホワイトカラーとブルーカラーという 2つのカテゴリーに分類し、ダミー変数化した。Welch の修正分散により、5%水準で有意差がみられた ( $F(1, 69.02)=7.16, p<.05$ )。母親の職業と現実型の家事分担意識との関係を箱ひげ図により示した (図 5-3)。差を具体的に見ていくと、母親の職業ホワイトカラーであれば、ブルーカラーやパートより現実的な家事分担意識は平等であることがわかった。しかし、母親の職業と性別役割意識の有意差は見られなかったため、母親の職業はブルーカラーや無職であれば主に伝統的な性別役割意識が強いという想定と違っている。また、母親の職業を専業主婦とその他という 2つのカテゴリーに分類し、ダミー変数化した。しかし、回答者の母親の職業は専業主婦であることと従属変数は有意差がみられなかったことは、今回の研究では十分に説明できなかつたため、今後は標本数が増加させることで、検討を行いたいと考える。

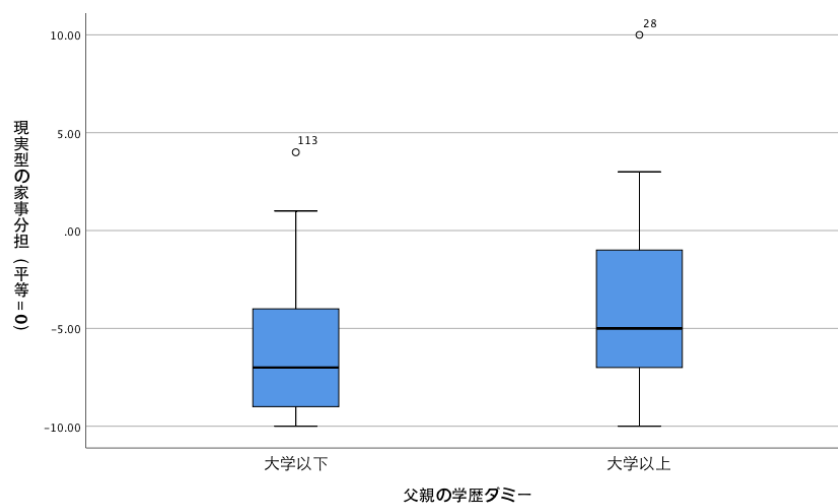


図 6 回答者の父親の学歴と現実型の家事分担意識との関係

次に分散分析の結果から見て、回答者の両親の学歴の違いにより現実型の家事分担意識に差があるかどうかを分散分析により検討した。Welth の修正分散により、父親の学歴と現実的の家事分担は 5%水準で有意差がみられた ( $F(1, 76.54)=4.07, p<.05$ )。父親の学歴と現実型の家事分担意識との関係を箱ひげ図により示した (図 6-1)。差を具体的に見ていくと、父親の学歴は高ければ高いほど現実的の家事分担意識は男女共に分担するという考え方が多いため、想定と一致する。

		理想型の家事分 担 (平等=0)	現実型の家事分 担 (平等=0)	性別役割意識
社会階層	相関係数	-0.037	-.192*	0.103
	N	117	117	112

表 2-3 自分が思った社会階層と従属変数との相関分析

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

自分が自らの社会階層がどの位置に位置するのかを調査票の問 17 に設定し、問 17 の得点は高ければ高いほど自分が高い地位に位置していることを思った。社会階層は現実的な家事分担との有意確率は 0.038 である。つまり自分の社会階層が高いほど家事分担は平等であることがわかった。

#### (6) 家族システムと性別役割分業意識

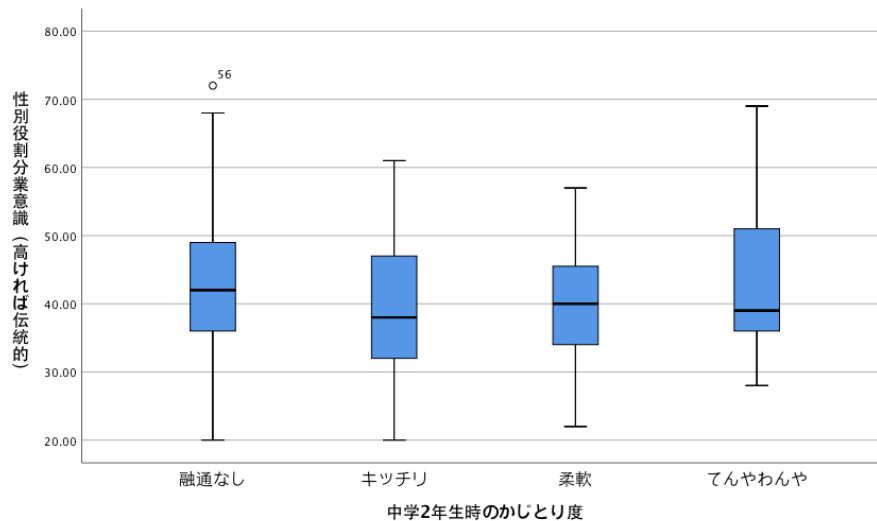


図 7-1 中学 2 年生時の家族かじとり度と性別役割意識との関連 (筆者作成)

中学 2 年生時の家族健康度を測るための FACESKGIV-16(version 4)のかじとり得点の素

点を基に-2未満は融通なし、-2以上0未満はキッチリ、0点以上2点未満は柔軟、2点以上はてんやわんや、とカテゴリー化し、それぞれに対応する性別役割分業意識の得点を示すにより、関係の形状を視覚的に図4-1に箱ひげ図に表示した。

かじとりと性別役割分業意識のありようは、家族システムが「柔軟」である状態は得点が小さい、つまり「男性が仕事・女性は家事育児」という伝統的な性別役割分業意識に同感しない。しかし家族システムが両極端（融通なし、てんやわんや）にある家族状態はカーブリンアの関係があるが、想定とそれほど大きな差異がない。特に「てんやわんや」である家族システム状態は中庸である「キッチリ」より得点が少ないというところは今後標本数が増加させることで再検討することが必要であると考えている。

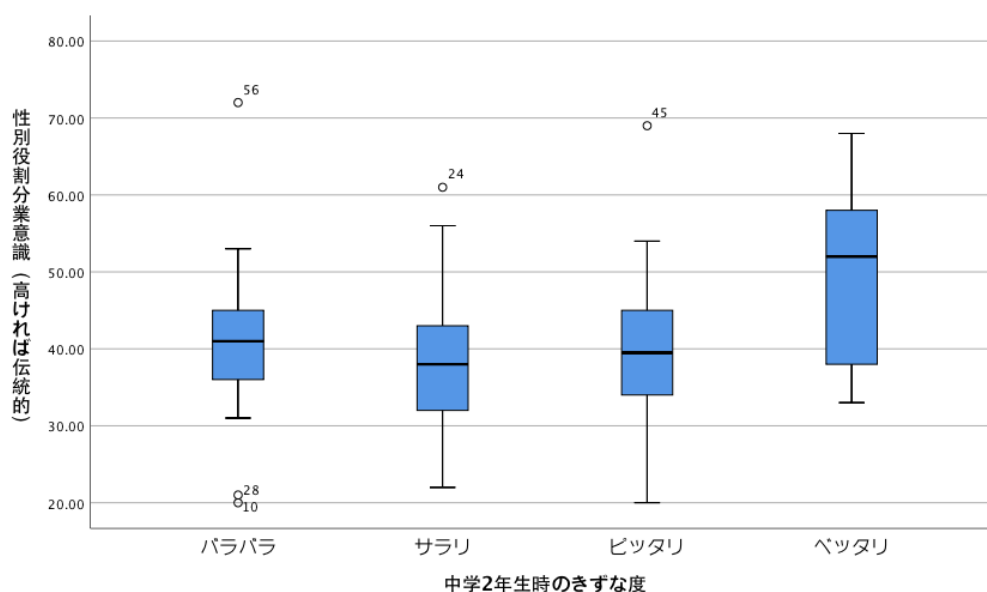


図7-2 中学2年生時の家族きずな度と性別役割意識との関連（筆者作成）

中学2年生時の家族健康度を測るためのFACESKGIIV-16(version 4)のきずな得点の素点を基に-2未満はバラバラ、-2以上0未満はサラリ、0点以上2点未満はピッタリ、2点以上はベツタリ、とカテゴリー化し、それぞれに対応する性別役割分業意識を示すにより、関係の形状を視覚的に図4-2に箱ひげ図に表示した。

きずなと性別役割分業意識の関係は、家族システムが中庸な状態（サラリ）にあるときに、性別役割分業意識得点が小さい。つまり「男性が仕事・女性は家事育児」伝統的性別役割分業意識に同感しない、最も平等な考え方である。次に家族システムが「ピッタリ」にある得点が次に平等な考え方である。家族システムが極端である（ベツタリ）の得点が大きい、つまり家族システムが「ベツタリ」であるほど「という伝統的な性別役割分業意識に同感する。しかし家族システムが「バラバラ」である状態は「きずな・かじとり両次元とも中庸であれば機能度が高く、逆に中心から正負いずれの方向へ逸脱すれば逆機能的である」という想定と違って、性別役割分業意識得点が小さい、つまり伝統的な性別役割意識に同感しないということである。

#### 4. 考察

仮説に対して、本研究で得られた結果は「円環モデルではきずな・かじとりの両次元とも中庸であれば将来現実的な家事分担が男女ともに分担する志向性が高い」であり、一部であるが仮説を実証するものであった。きずなは「家族の成員相互情緒的結合の程度に関係している」と定義している。つまり家族きずなのバランスが取れた段階（ピッタリとサラリ）で家族システムは最もうまく機能し、個人の成長も促進することで、家事の分担もより平等に分担する結果になった。一方、家族かじとりも同じく、かじとりの次元の真ん中の段階（キッチリと柔軟）に位置することが最も健康な家族システムであり、こういった家族は形態維持と形態変容の間のバランスが保たれていることで、お互いにコミュニケーションを通じて言いたいことが言え、リーダーシップは民主的であり、交渉がうまく進めるという環境下で育てられた人はよりよく家事分担をするという志向性がある。

しかし、家族システムが理想型の家事分担に対する現実型ほど志向性の差異がなかった。多くの先行研究によると日本社会の中では男女の性別役割分業意識が薄れているということを指摘した。将来の意識というのはそもそも理想化となっているので、性別役割分業意識と同じく、考え方としては昔と差異がある、しかし村田（2015）が述べたように「社会の中では男女の役割分担意識が薄れているにもかかわらず、家庭では伝統的な役割分担がまだ固定化されているために、女性は不公平感や不満を募らせているのではないだろうか」と本研究の現実と理想の意識に関する差異について筆者も同意する。これら理想的意識と現実の状況の差異に関するテーマは今後の研究に検討すべき点である。

また、立木（2015）は円環モデルの構成概念間の機能的関係を解釈する時に述べたように「バランスの取れた家族では、きずなが常に中庸な段階にあるとは限らない。必要とあれば、極端な関係にもなりうると思うのである。」ということと「たしかに文化的な規範の違いなどによってこれらの極端に位置する家族でも、こうした危機を問題なく乗り越えることがあるかもしれない。しかしバランスの取れていない家族は、長期的にみれば、変化・成長していく過程で、より問題が発生しやすいといえる」と指摘したが、今回の質問票の中で、変化・成長を反映する質問がなかった。これについては、仮説を立てる段階での慎重さが欠如していたためであり、今回の調査で反省すべき点である。



## 5. 結論

本研究では、大学生の将来の家事分担に関する志向性を明らかにすることと、大学生の家族の健康度が家事分担に与える影響について検討することを目的として、研究調査を行った。具体的には、オルソンの家族円環モデルに基づき、FACESSKG-16(version4)を用いて、「きずな・かじとり」の両次元が、将来の理想的な家事分担及び、将来の現実的な家事分担に与える影響を検討した。本研究の1.2で紹介した先行研究を参考に、「円環モデルではきずな・かじとりの両次元とも中庸であれば将来、家事分担の志向性が高いまたは伝統的な性別役割分業意識に同感しない。逆に中心から正負いずれの方向へ逸脱すれば逆意識である」という仮説を立て、質問紙調査およびSPSSを用いて調査・分析を行った。

本研究は「円環モデルではきずな・かじとりの両次元とも中庸であれば将来現実的な家事分担が男女ともに分担する志向性が高い」ということは仮説と一致する。しかし、家族システムは将来理想的な家事分担に影響を与えなかった。つまり、「きずな・かじとり」の両次元が中庸や極端であるにも関わらず、人々の理想的な意識は将来の家事分担は男女同程度で行うということである。本研究で得られた結果は、将来理想的な家事分担と将来現実的な家事分担に対する人々の意識には大きな差があることがわかった。

仮説のほかに得られた結果としては、個人属性についてそれぞれ「男性であれば将来の家事分担が主に女性が分担してもらいたい」、「両親の職業や学歴が高いであれば将来の家事分担が最も平等である」、「外国人大学生は日本人大学生と比べて、より家事分担が平等である。」など分析の結果から、将来の家事分担には家族健康度だけではなく、より多様で複雑化した、様々な要因が含まれているということが読み取れた。

最後に、本研究の成果を述べると、将来現実的な家事分担の志向性の規定要因は大学生の家族健康度と出身、性別や両親の属性と関連していることが明らかになった。一方、日本政府が積極的に男女平等に促進する制度や法律を整備しているにも関わらず、家庭生活における男女間格差は未だ残っている。今後の研究は男女間格差是正を目的とする。このような研究によって、日本政府は単に家庭生活の中で家事分担の平等を実現することに力を入れるだけでなく、さらに日本社会におけるワーク・ライフ・バランスを実現するためにはどういった環境、制度が必要かを検証していくことが期待される。

文献目録（アルファベット順）：

Hochschild. A. R,1989, “The Second Shift: Working Parents and the Revolution at Home”

Viking Press（田中和子訳,1990,『セカンド・シフト アメリカ共働き革命のいま』朝日新聞社）

岩井紀子, 2001, 「高年齢層の夫婦における夫の家事参加—夫婦の就業、健康状態、介護への従事、生帯構成、性別役割分業観の影響」岩井 紀子編 『家庭生活についての全国調査報告書（NFR98）現代日本の夫婦関係』NO2-3

岩間暁子, 1997, 「性別役割分担と女性の家事分担不公平感——公平価値論・勢力論・衡平理論の実証的検討」『家族社会学研究』, 9: 67-76.

稲葉昭英, 1998, 「どんな男性が家事・育児をするのか？-社会階層と男性の家事・育児参加-」渡辺秀樹・志田基与師編『階層と結婚・家族（1995年SSM調査シリーズ15）』1995年SSM調査研究会: 1-42.

乾純子, 2011, 「正規就業と性別役割分業意識が家事分担に与える：NFR08を用いた分析」『年報人間科学』.32 21-38

小山静子, 1991, 『良妻賢母という規範』勁草書房

梶谷みゆき, 2018, 「家族評価尺度を用いる家族研究の文献概観」『島根県立大学出雲キャンパス紀要』第13巻, 121-131

小林利行, 2013, 「『結婚』や『家事分担』に関する男女の意識の違い～IPSS国際比較調査（家庭と男女の役割）・日本の結果から～」『放送研究と調査』2013年4月号

久保桂子, 2009, 「フルタイム共働き夫婦の家事分担と性別役割分業」『千葉大学教育学部研究紀要』第57巻 275-282

松田茂樹, 2001, 「性別役割分業と新・性別役割分業—仕事と家事の二重負担—」岩井紀子編『現代日本の夫婦関係』日本家族社会学会, 全国家族調査（NFR）研究会——, 「男性の家事・育児参加」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族構造と変容』東京大学出版会, 175-200

村田ひろ子, 2015 「家庭生活の満足度は、家事の分担次第？～ISSP国際比較調査『家庭と男女の役割』から～」『放送局研究と調査』65（12）

NHK放送文化研究所編, 2011, 「日本人の生活時間・2010-NHK国民生活時間調査」NHK出版

———, 2015, 「現在日本人の意識構造[第八版]」, NHK出版

西村純子, 2001, 「性別分業意識の多元化とその規定要因」（14）, 年報社会学論集 139-150

中川まり, 2010, 「子育て期における妻の家庭意識と夫の家事・育児参加」『家族社会学研究』, 22（2）: 201-212

落合恵美子, 1997, 『21世紀家族へ—家族の戦後体制の見かた・超えかた 新版』有斐閣選書

鈴木富美子, 2011, 「休日における夫の家事・育児への関与は平日の『埋め合わせ』になるのか—妻の就業形態、ライフステージ、生活時間に注目して」『季刊家計経済研究』92: 46-58

立木茂雄, 2015 「家族システムの理論的・実証的研究」萌書房

大和礼子, 1995, 「性別役割分業意識の二つの次元—『性による役割振り分け』と『愛による再生産役割』」 『ソシオロジ』 40 (1) : 109-126.

URL

錦光山雅子,井上亜梨沙,2017 「日本のジェンダーギャップ指数、過去最低を更新 114 位」  
(2017 年 11 月 02 日に取得 :

[https://m.huffingtonpost.jp/2017/11/01/nippon\\_a\\_23263093/](https://m.huffingtonpost.jp/2017/11/01/nippon_a_23263093/)) .

国立社会保障・人口問題研究所,2014 「第 5 回全国家族動向調査 (2013) 」

([http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ5/NSFJ5\\_top.asp](http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ5/NSFJ5_top.asp))

内閣府,2018 「すべての女性が輝く社会づくりページ | 首相官邸ホームページ」

([https://www.kantei.go.jp/jp/headline/josei\\_link.html](https://www.kantei.go.jp/jp/headline/josei_link.html))

## 卒論アンケート調査

この調査は家族の健康度と将来、家事育児の志向性を調査、分析するための資料を得ることを目的としています。回答は全て卒業論文作成のためだけに使用され、個人が特定され、どのようにお答えになったかは他人に漏れることは一切ありません。みなさんは、深く考えずに直感で判断し、すぐに次の質問に移ってください。

調査は5分ぐらいで終わるので、ご協力をお願いします。

同志社大学 立木ゼミ  
社会学部 社会学科  
19151089 王ゆうれい  
bsp1089@mail2.doshisha.ac.jp

## 私立大学生の家庭健康度が将来、家事育児の志向性に与える

### 影響

問1. 以下は「男女平等感」をたずねる項目です。あなたは、それぞれの問いに、どの程度あてはまりますか。もっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

1	2	3	4
あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない

- |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| <input type="checkbox"/> 家庭生活中では、女性より、男性の方が優遇されていると感じる。     | 1 | 2 | 3 | 4 |
| <input type="checkbox"/> 地域活動面では、さまざまな方面で男女不平等だと感じたことがある。   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| <input type="checkbox"/> 学校では、さまざまな方面で男女不平等だと感じたことがある。      | 1 | 2 | 3 | 4 |
| <input type="checkbox"/> 就職活動中、女性より、男性の方が優遇されていると感じる。       | 1 | 2 | 3 | 4 |
| <input type="checkbox"/> 政治・経済の分野では、女性より、男性の方が優遇されていると感じる。  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| <input type="checkbox"/> 法律や条例制度の方面では、女性より男性の方が優遇されていると感じる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |

次のページに続きます。

問2. 以下は「男女に関する印象」をたずねる項目です。あなたは、それぞれの問いに、どの程度あてはまりますか。もっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

	1 あてはまる	2 どちらかといえば あてはまる	3 どちらかといえば あてはまらない	4 あてはまらない
① 人から危害を加えられそうになったとき、身を守るには、やはり男性でないとダメと思う。	1	2	3	4
② 大地震や津波など緊急事態のとき、その場を取り仕切るのは、やはり男性でないとダメと思う。	1	2	3	4
③ 自分が病気や介護を必要とするとき、やはり女性に面倒を見てもらいたいと思う。	1	2	3	4
④ 自分が大きな病気で手術しなければならないときに、女性の医者より男性の医者に見て欲しいと思う。	1	2	3	4
⑤ 重いものを運んでもらうとき、やはり男性でないとだめだと思う。	1	2	3	4
⑥ 小さい子供の世話やお年寄りの介護をする人は、やはり女性の方がいいと思う。	1	2	3	4

問3. 以下は「男女の役割分担」をたずねる項目です。あなたは、それぞれの問いに、どの程度あてはまりますか。もっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

	1 あてはまる	2 どちらかといえば あてはまる	3 どちらかといえば あてはまらない	4 あてはまらない
① 「男は仕事、女は家庭・育児」という考え方を同感している。	1	2	3	4
② 食事、洗濯、掃除などの家事は女性が男性より多く担うべきだと考えている。	1	2	3	4
③ 自治会活動への参加は女性が男性より多く担うべきだと考えている。	1	2	3	4
④ 近所とのつきあいは女性が男性より多く担うべきだと考えている。	1	2	3	4

以下の質問は、現在ではなく、将来あなたに家族ができたときのことを想定して家事の分担をたずねる項目です。

問4、将来、あなたに家族ができたときに、以下項目について、どのように分担するのか、望ましいと思えますか。もっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

	1 主に女性	2 どちらかという と女性	3 男女 同程 度	4 どちらかとい 男性	5 主に 性
① 食事の用意	1	2	3	4	5
② 食事あとの片付け	1	2	3	4	5
③ 食料品や日用品の買い物	1	2	3	4	5
④ 洗濯	1	2	3	4	5
⑤ 掃除（お部屋、お風呂、トイレなど）	1	2	3	4	5

問 5、問 4 の理想的な家事分担に対して、あなたに家族ができたときに、実際はどうかを予測し、もっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください

	1 主に女性	2 どちらかという と女性	3 男女 同程 度	4 どちらかとい 男性	5 主に 性
<input type="checkbox"/> 食事の用意	1	2	3	4	5
② 食事あとの片付け	1	2	3	4	5
③ 食料品や日用品の買い物	1	2	3	4	5
④ 洗濯	1	2	3	4	5
⑤ 掃除（お部屋、お風呂、トイレなど）	1	2	3	4	5

以下の質問は家族生活に関する質問文が含まれています。各質問文を読み、その内容があなたの中学校時代にどれくらいよく当てはまるかを考えてください。中学校2年生の頃を思い出して回答してください。

なお、「家族」や「親」などの言葉はあなたが中学2年生の同時の生活状況に応じて適宜、家族や親に相当する集団や人々に置き換えてください。（たとえば、養護施設など主たる生活の場、主たる保護者など。）

問 6、以下、8つの選択肢のなかで、あなたが中学2年生の当時、あなたとあ



あなたのご家族の状況と最も当てはまる状況に一つに○をつけてください。

【 】 私の家では問題が起こると家族みんなで話しあい、決まったことはみんなの同意を得たことである。

【 】 私の家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆で補い合うこともある。

【 】 私の家では困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断を下す人がいる。

【 】 私の家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる。

【 】 私の家では家の決まりはみんなが守るようにしている。

【 】 私の家ではみんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない。

【 】 私の家では問題が起こると家族で話しあいがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がとおる。

【 】 私の家では家族で何か決めても、守られたためしがない。

問 7、以下、8つの選択肢のなかで、あなたが中学2年生の当時、あなたとあなたのご家族の状況と最も当てはまる状況に一つに○をつけてください。

【 】 私の家ではだいたい各自すきなように過ごしているが、たまに家族一緒に過ごすこともある。

【 】 私の家では子どもが落ち込んでいるときは親も心配するが、あまり聞いたりしない。

【 】 私の家ではもしなにが悩みあったら、家族に相談することがある。

【 】 私の家では家族はお互いの体によくふれあう。

【 】 私の家では家族の間で、用事以外の関係は全くない。

【 】 私の家では家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がなない。

【 】 私の家では休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある。

【 】 私の家ではだれかの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている。

問 8、中学生2年生の時にあなたの毎月お小遣いはどのくらいもらっていましたか。だいたい結構ですので、教えてください。以下の選択肢から1つを選び、( )の中に記号を記入してください。

A. 千円未満    B. 千円以上    C. 2千円以上    D. 3千円以上    E. 4千以上

F. 5千以上

G. その他 (       )

お小遣い ( )

問 9、あなたの年齢と性別を教えてください。年齢は( )の中に数字を記入してください。性別は( )の中から当てはまるものと一つ選んで、○をつけてください。

年齢 ( ) 歳 性別 ( 男 ・ 女 )
-----------------------

問 10、あなたの学部と学年を教えてください。それぞれ( )の中に数字を記入してください。

( )学部 ( ) 回生

問 11、あなたのご出身を教えてください。( ) 中に都道府県、海外でしたら、国名を教えてください。

( )

問 12、**中学2年生**に同居していたご家族の構成について教えてください。同居されていた全ての人の番号を○をつけてください。

- 1、 父親 (あるいはそれに相当する人)
- 2、 母親 (あるいはそれに相当する人)
- 3、 兄弟 ( ) 人
- 4、 祖父母
- 5、 一人暮らし
- 6、 その他 ( )

問 13、あなたが**現在**同居しているご家族の構成について教えてください。同居されていた全ての人の番号を○をつけてください。

- 1、 父親 (あるいはそれに相当する人)
- 2、 母親 (あるいはそれに相当する人)
- 3、 兄弟 ( ) 人
- 4、 祖父母
- 5、 一人暮らし
- 6、 その他 ( )

問 14、現在のご両親の年齢を教えてください。( )の中の数字を記入してください。問 13 でその他を選択された方、( )に数字を記入してください。

父 ( ) 歳 母 ( ) 歳 その他 ( ) 歳

問 15、現在、ご両親の職業を教えてください。以下の選択肢から両親それぞれの職業を選び、( )の中に数字を記入してください、その他に場合には( )の中に書いてください。

- 1、民間企業の役員、管理職 2、民間企業の事務職 3、民間企業の労務職  
4、民間企業の営業職 5、民間企業の専門・技術職 6、公務員  
7、農林漁業の自営者・家族従業員 8、商工・サービス業の自営者・家族従業員  
9、自由業 10、パート・アルバイト・臨時雇いなど 11、無職 12、専業主婦  
など

13、その他 ( )

父 ( ) 母 ( )

問 16、ご両親の学歴を教えてください。以下の選択肢から両親それぞれの最終学歴を1つ選び、( )の中に数字を記入してください。

- 1、中学校 2、高等学校 3、高等専門学校 4、専門学校 専修学校  
5、短期大学 6、4年制大学 7、大学院前期(修士) 8、大学院後期(博士)  
9、その他 ( )

父 ( ) 母 ( )

問 17、以下の文章を読んで、それぞれの問いに、あなたはどの程度あてはまりますか。もっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

(a)「かりに現在の日本の社会全体を、以下の5つの層に分けるとすれば、あなた自身は、どれに入ると思いますか。」

1. 上 2. 中の上 3. 中の中 4. 中の下 5. 下

(b)「わたしたちの社会には上層に位置するグループや下層に位置するグループがあります。次のような上から下までのスケール(尺度)で、あなたはどこに位置すると思いますか。」

一番上 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 一番下

質問は以上になります。

恐れ入りますが、

記入漏れがないかもう一度ご確認ください。

ご回答いただきまして

ありがとうございました。